蘇芳集

父の日の

青山　丈

閉園後落ちると思ふ椿かな
山茱萸の木を何本か潜りけり
目を閉ぢて開いて閉ぢて牡丹かな
見えてゐる大きな桜まで歩く
噴水の一番前の音がする
紫陽花の雨家に居て降られけり
父の日の顔を鏡に見ておきぬ

足柄へ

小島　みつ如

薬手に十粒富士は花霞
囀りの丘ドライフラワー展へ
受付てふ写真撮らるる花の昼
傘寿の春草花散らし白板に
のどけしや一度限りの展覧と
つつましき草の今はを飾り春
金時山背に一握の土筆摘む

風遊ぶ

清水　裕子

空へ帽子投げたき心地山笑ふ
剪定の音に鳥翔つこゑ残り
空重き日の今年竹騒がしき
椿つぎつぎ落ちて嫌なこと思ふ
春の鴨動かず人に見られても
夏蝶の白きに風の遊ぶかな
ふらここの揺れの残りて母の許

初ざくら

下平直子

初ざくらはつきりと師の笑ひごゑ
この角に昔たばこ屋朝桜
花明かり病院前でバスを降り
わが窓にわれ待つ明かり桜の夜
老鶯の思はぬ近さ雑木山
待つ文の届かぬままに春深し
電車いま春田明かりを東京へ

かぎりなく

冨田正吉

くれなゐの椿歩けば動くなり
かぎりなく揺れる椿の今はいま
戦争は遠くて近し火の椿
にんげんに逢ひたくなりし椿山
歩くだけ歩けば椿ありにけり
紅椿座つて見よと椅子ひとつ
まなうらに椿あつめて眠りけり

森と云ふ

野路斉子

枇杷実る辺り明るく森と云ふ
太陽の色森暗く熟れて枇杷
夏枯れの花壇小雨が修復中
母の忌の空よ泰山木の花よ
目礼を受けて目礼梅雨晴間
梅雨深く雀激減でも一羽
荒梅雨となるか干す傘ころがつて

眼の端

別府優

仏生会いくたびか口漱ぎをり
寝転ぶと桜の見える窓のあり
抽斗の今を取り出す桜の夜
言ひ出しの言葉にごらす啄木忌
いつよりも厚く皮剝く穀雨かな
何しても眼の端にある鯉幟
走り梅雨向かひの家の灯の強し

たけなはの

前田　陶代子

ひかりとどめて魁の紫木蓮
たけなはの春や草木色重ね
往き交へる人影あをく花万朶
けふの色加へてけふの花筏
桜散り込む雨冷のにはたづみ
ひとひらのさくらの冷を胸中に
夫の日々吾の日々桜しべ降りぬ

花の世

峰岸　よし子

まほらまの塔や仏やかげろへり
花の世へ媼の押せる乳母車
遠き日の挫折いくたび野芹摘む
読み返しては燃す手紙亀鳴けり
入り彼岸水辺の鳥のにぎはへり
柳絮とぶ天上に楽ありさうな
クレーンのぎくしやく動く啄木忌

漣ひたに

宮尾　直美

葦牙や漣ひたに舟を搏つ
万屋も駄菓子屋も消え鳥雲に
引鶴の声の残りし虚空かな
吊し売るビニール傘や燕来る
一人来てまたひとり来て春田打つ
桜蘂降るゆつくりと霊柩車
砂の上を砂吹かれゆく啄木忌

落花一片

八木下　末黒

雨脚の奥にゆれゐる遠桜
妻遠く亡き人近し夕さくら
早死の弟悼む山さくら
遺されて雨の桜を歩くかな
道場の落花一片これを掃く
桜蘂うち重なつて踏応へ
葉桜や朝のベンチに冷えありぬ